

## 日台青年交流事業 2015年2月3日～2月10日

公益財団法人交流協会では、日本と台湾との青年交流を促進するため、日本に関する様々な分野について研究をしている台湾の大学生を日本へ招聘しております。平成26年度は、2015年2月3日から2月10日の8日間、“ウインターキャンプ”として20名を招聘致しました。ここに、今回招聘した20名のうち、男女各2名の訪日報告書をご紹介します。

### 最も美しい風景は人

淡江大学  
英文学科 二年 林勃志



飛行機が飛び立つ時、なぜか奇妙な感覚に陥りました。日本、こんにちは。東京羽田空港、ここは私が初めて踏み入れた日本の国土です。初日の行程は多くはありませんでしたが、とても日本の郷土色が強いものでした。和風の建築、玄関にある仁王、室内の畳、初めての温泉。そして露天風呂で末石さんと初めて話をし、私はここで多くのことを学べるのだと深く感じました。食事前の礼儀から日本人の心の持ちようまで様々なことを。同室の男子学生とは色々な話をしました。ウインターキャンプに参加した学生は本当にレベルが高く、とてもすごい学生たちでした。会話の中からもそれがよく分かりました。私たちは台湾高等教育の希望であり、自分の夢を持っています。自分の目標を持っています。所謂「イチゴ族」と呼ばれる岐路で迷っている学生とは違います。その日の夜、私は初めて雪を見ました。かまくら祭りでは日本人の芸術や作品に対する意識を理解しました。どのかまくらも適当に作られてはおらず、全てが心を込めて作られた作品であり、最高芸術でした。日本での最初の朝は伝統的な和朝食から

始まりました。みそ汁の温かさは胃の中から私にこう語りかけるようでした。日本での数日間、私は体からもしくは心から日本文化や知識を吸収するのだと。日光東照宮にある碑にこんな言葉が書かれていました。大凡の意味は急がなければ目的地に到着できる、だからゆっくりと行けばいい、というものでした。実際私が日本で過ごした時間で一番大きな収穫は多くの人、素晴らしい人に出会ったことと精神的な成長でした。それらは私の心に美しい景色として焼き付けられ、今後一生の助言となりました。初めて日本の大学生と交流し、一緒に討論し、そして初めて日本語で自分の意見を発表し、報告しました。多くの友達ができ、心の中は満足感に溢れ、世界どこにいても一人ではないという感覚に陥りました。日程が進むにつれて、慌ただしい行程ではバスの中でようやく休むことができました。しかし日本の街並を見ていると常に台湾と比較をしてしまいます。日本人の公共衛生への配慮、その建設及び一貫した対応に気づきました。小さな点、それはゴミ箱一つを取ってみても日本人の配慮に気づくことができました。

ホームステイでは、お父さんが議員で、家の中には選挙のポスターがあり、少し不安に感じましたが、お父さん、お母さんともにとても優しい人でした。彼らには子供がおらず、だから多くのホームステイを受け入れているのだそうです。スーパーに言った時、もてなされているという感

覚を受けました。鈴木ママは私たちを本当の子供のように、何が食べたいか尋ねてくれ、多くの果物を買ってくれました。また私たちの健康を気づかって牛乳を買ってくれました。更に私たちの健康のためヤクルトを買ってもらった瞬間、私が小学生の頃にお母さんの手を引いてヤクルトをせがんだ場面を思い出しました。鈴木ママは私たちとスーパーで買物をした時間を楽しんでくれたでしょうか？心の中でくすっと笑いつつ、心の中には一滴の涙も流れました。別れのときはきっと辛いだろうと思ったからです。ママは何が美味しいか、近くのどこが楽しいかを話してくれました。可能ならばもっと彼らのそばにいたかったです。鈴木ママは伊東はとても素晴らしい場所で、山も海もあり、美味しい物がたくさんあるのだと話してくれました。その時私は心の中であることを決めました。将来私は日本を訪れ、サプライズで彼らを尋ねようと。翌朝、私たち一行はリフトに乗り、大室山に登りました。皆で美しい富士山を見た時、私は柱に書かれた字に目が止まりました。「世界人類が平和でありますように」。私の頭によぎったのは戦争、貧富の差、種族という言葉です。私たちは皆一緒なのです。人に貴賤はないのです。伊東市の美しい眺望を見た時、私の心は清々しさと満ち溢れ、私の脳を目覚めさせ、充電させてくれました。この言葉は私の心に刻まれました。これは私が得られた大きな贈り物です。

この旅行で、私は多くの初体験をしました。数多くの美味しい食事、数多くの美しい景色、しかし最も美しく、最も忘れ難いもの、それは人です。この旅行では貴重な体験が多く、地元の日本料理を食べ、豪華で荘厳な和服を着ました。しかしこれらはどれも阿部さんや鹿養さんの笑い声にはかないません。一、二、三！まだ日本を離れて数日ですが、彼女たちの写真を撮るかけ声を懐かしく感じます。また末石さんの笑い声や彼の道を歩く背の高い後ろ姿、流暢に操る北京訛りの中国語も

懐かしく感じます。全て、本当に全てが急に遠くなってしまいました。そしてウィンターキャンプを一緒に過ごした仲間たち。私たちは将来きっと再会することでしょう。私たちの心は強い絆で結ばれています。私は日本も団員たちも忘れてりません。これは私たちが日本を訪れて得た最も貴重な収穫です。晚餐の席で林副組長がこうおっしゃいました。私たちは政治、経済、外交を比べてみても、私たちが最も重要なこととして学ぶべきは日本人の精神と何事にも真面目に取り組む態度だ、と。それは「完璧な事前準備」であり、今回の旅行でも一切何も突発的なアクシデントはありませんでした。一切の準備が万端で、私たちに最高で素晴らしい楽しみと体験を与えてくれました。これが日本人です。謙虚で、真面目な点は私たちが学ぶべき点です。土評が「日本は最初に台湾と断交をした国家ですが、将来日本は最初に台湾と国交を結ぶ「国家」となって欲しい」と発言し、その時は多少の騒ぎを引き起こしました。しかし私は彼の意見には理があると思います。なぜ交流協会があるのでしょうか。なぜ東京に台北経済文化代表処があるのでしょうか。私たちには交流が必要です。双方の橋渡しをする人材を育てなければなりません。そうすることでアジアが、世界がもっと良くなるのです。台湾と日本の間には良好な関係がある、と私は思っています。国際社会において台湾は外交で数々の困難に出会ったり、天災で緊急的な状況になっても世界中から多くの援助を得られる国です。日本に来てみて、日本人は台湾人に対して本当に友好的なのか、それともただ「客人」としての温かさなのか、私は答えを得ました。多くの学生と交流し、彼らが本当に台湾を理解したいと考えていること、台湾を好きだということが分かりました。それは私たちも同様で、日本を理解し、日本を認識し、日本に関わることで、双方のより良い未来のために私たちは力を積み重ね、より良い明日へと歩き出すこと



で、未来は更に良いものとなります。私は台湾人であることを誇りに思います。幸せに思います。日本を知ることができたことも私の誇りです。ホームステイでの歓迎会の夜、私は島唄を歌いました。私は気持ちを言葉で表すことが苦手です。ですから私の感謝の気持ちを全て歌に任せたのです。私は日本に戻って来ます。多くの収穫がありました。将来私はそれらを日本に還元します。また今回のウィンターキャンプのメンバーには卒業する人、留学する人、続けて学業を修める人など様々ですが、今回の日本旅行は私たちを結びつけ、私たちはともに社会のため、世界のため貢献できるように頑張ります。例え各地に散らばっても、私たちは同じ空を見て、より良い未来へとゆっくり進むのです。

## 光が交差する梅と桜

国立中興大学食品応用生物  
科学技術学部 蕭宜庭



今回のウィンターキャンプ、私は出発前に自分

に目標を持たせました。それは「自分自身の日本を見る」ということです。メディアや先輩、友人、ネットなどの他人の目から見た日本、ではなく。そして終了後、八日間は充実していて、まるで一ヶ月程過ぎたような感覚でした。その中で得たものは私が以前持っていた知識を完全に上回っていました。今回の目的は以前の日本との相違点を確認するのではなく、初めてこの国をきちんと認識することです。ウィンターキャンプは終了と同時に、新たな始まりを迎えました。この八日間を思い出すと、私は押さえきれずに日本に関してもっと色々なことを学び始めたのです。

最も得難い経験は日本の大学生との交流と討論です。宇都宮大学、地方色のある静岡県立大学、トップクラスの大学の一つ、東京外国語大学、この分野の違う三校はそこで学ぶ学生たちにも各々特色がありました。宇都宮大学の学生は台湾の認識が深く、中国語能力も高かったです。観光に関する議論の時もユーモラスな話し振りと高い統制能力を持ち合わせていました。その中で日本人は台湾に関する情報の多くは雑誌や旅行書、旅行番組から得ているのだと知りました。台湾人は主にネットを介して日本を知ります。台湾のネット力は日本にまで及んでいないのかと思わず考えてしまいました。もしくは私たちの固有の文化は日本人に台湾を理解させたいとは思わせないのでしょうか？ 私たちが伝えたい台湾は101や小籠包だけなののでしょうか？

二日目、静岡県立大学に行きました。その学生は宇都宮大学の学生のように皆が台湾を理解しているわけではありませんでした。彼らの台湾に対する認識は、位置や食べ物が美味しいということだけでした。台日関係は良好ですが、全ての日本人が台湾を良く知っているわけではありません。つまりは民間外交がとても重要になってくるのです。静岡県立大学での討論テーマは比較的難しいものでした。しかし私たちは多くの貴重な考えを

得ることが出来ました。例えば日本の学生が政治に対して興味が低い原因です。それは日本が高齢化社会であるため、立候補者が老年層の票を優先的に獲得しようとしており、若年層の考えを重視しないため、若年層は自分の一票が重要ではない、と考えるようになったのです。私たちのグループテーマは台日双方の影響です。私たちは容易に日本の台湾への影響を列挙できたにも関わらず、台湾の日本への影響を討論する時結論をまとめることができませんでした。先生の指摘の後、台湾の日本への影響は比較的内面にあるのだと気づきました。例えばOEM産業等です。私たちが見ていたものはとても表面的だったのです。台日の間には食べ物、建築、文化の他に多くの関係が私たちの見えない部分で緊密に繋がっているのです。今回の交流で新しい知識を学んだ他、私たち自身の欠如している部分を顧みることができました。

最後、私たちは東京外国語大学を訪れました。ここの学生は経験も豊富で、多くが留学の経験を持っています。更に日台学生会議に参加している学生や会社の運営事務を始めている学生すらいました。討論の中で私たちは一体台湾の何を推薦したいのですか、と先生が問いかけて来ました。私たちが考えて出した答えは——文化。台湾は日本のような独特の文化は持っていません。しかし中国文化、日本の殖民、少数民族の伝統を併せ持つ台湾の新しい文化が精錬されました。更には現代の文化創造産業が結合し、私たち独自の特徴を持ちました。この答えは私たちが異郷を旅した最終日によく出し得た答えです。日本へ来て、日本を理解しただけではなく、台湾に対しても新たな考えを持つことが出来ました。

学生交流で日台の相違点を理解した他、景色も日本は台湾と多くの点で異なります。今回日本へ到着して、初めて雪を見ました。雪に染まったまっすぐ延びた道路、平たい家屋、女神の名称を持つ富士山。特に駒ヶ岳ではぬかるんだ細い道を

歩き、真っ白な雪に覆われた山頂には神社が静かに建っていました。まるで絵画のような景色で、そのまま煙になって消えてしまうかのようでした。他に、車から凍結した湖面を見ました。一つトンネルを抜けるとそれはキラキラ波打つ湖面に戻っていました。同様に忘れられない景色は芦ノ湖と様々な角度から見た富士山です。大自然が私たちに多くのプレゼントをしてくれました。住み慣れた快適な環境から出ることで、私たちは各地に散らばった宝物を一つ一つ拾えるのです。他にも日本では文化的な風景もとても豊富です。徳川家康が眠る東照宮、地元住民で作り上げたかまくら祭り、以前から残されたものであっても現代に築かれたものであってもこれら文化が溶け込んだ風景は寒い日本で格別の温度を保っていました。

今回は多くの日本文化も体験しました。温泉、スキー、日本家庭等です。初めて全ての服を脱いで入る温泉を体験しました。最初はとても恥ずかしかったですが、上半身は寒く、下半身は温かい露天風呂、目の前に広がる雪が覆う山々は最も忘れ難い温泉経験となりました。初めてのスキーもとても新鮮でした。想像よりも難しくはありませんでしたが、移動は思うようにいきませんでした。日本の子供たちは誰もが非常に上手で、とても羨ましく感じました。日本の学生が言うには、日本の北部の人はスキーが得意で、南部の人は泳ぎが得意だそうです。このような地方の相違点はとても興味深いです。日本という土地は狭く長い。これにより各地に異なった文化が育ちました。今回体験したことはその中のほんの少しだけです。私はより多くの地域を理解したくてたまりません。ホームステイでは和服体験が用意されていました。当時私たちのホームステイ先ではこの体験は計画されていませんでした。心の中では少し残念に感じていたのですが、驚いたことに歓迎会の時にホームステイグループのお母さんが特別にスーツケースで何着もの和服を持って来て、私たち和



服を着ていない二人に体験させてくれたのです。しかも一般的な和服ではなく、結婚式に着る振袖を持って来てくれました。本当に感動しました。和服を着られたことよりもお母さんの心の温かさが心に深く染み入りました。

最も忘れ難いのはやはり人と人の「絆」です。宇都宮大学生は努力して言語の隔たりを乗り越え私たちと話しをしてくれました。静岡県立大学の学生とは居酒屋でお酒を飲みながら様々なことを

話しました。東京外国語大学の学生とは一緒に発表しました。日台学生会議のメンバーとは食事をしながら友情を深めました。これらの縁はとても貴重なものです。またホームステイではたった二日間だけの付き合いでしたが深く厚い情が生まれました。その時の「さようなら（再見：再び会いましょう）」はその場だけの建前ではありません。この他に、この活動中ずっと付き添ってくれた末石さん、阿部さん、鹿養さんはずっと私たちを注意深く見守ってくれました。常に連絡を取り、私たちの行動に目を向け、私たちの喜びのために喜んでくれました。人は旅の中の最も美しい風景です。これらの絆は私たちの心の底で結ばれています。ホームステイの歓迎会で、一人のおじいさんがこう言いました。彼は四十年前に台湾で仕事をしていた、多くの親切的な台湾人にあった。だから今彼はホームステイ先を提供している、と。この繋がりが今後もずっと続いて欲しいと感じました。たとえ時間が違って、場所が違って、人と人の繋がりは同じように温かいのです。今後私は今回受けた友情を出来る限り伝えて行きます。そうすることでこの旅の意義を残し続けて行きます。

今回のウィンターキャンプでは本当に多くのことを得ました。私は一体何を支払えばいいのでしょうか？私は社会学を学んだ学生ではありません



ん。しかし今回は社会学の角度から多くの観点と考え方を学びました。それらは自然科学の環境では得ることができなかつたものです。私の専門である食品生物科学技術の角度からも今回の日本旅行では多くの日本の先進科学技術を見ることができました。例えばコンビニでの多くの新商品と保存方法。更には日本各地の歴史や地理から醸し出された多様な「食」文化。数百年の技術の上に成り立つ多様な進化。食品は自然化科学だけでなく、その歴史、文化等社会科学の領域と切り離せません。もし日本で食品加工に関して研究できるならば、日本の文化を感じ、理解できるはずです。このような考えが私の心に芽生え始めました。このような専門の分野以外にも私は今後積極的に台日交流の機会に参加し、台日の架け橋の一部になりたいと思います。交流協会がウィンターキャンプを主催してくれたことに感謝します。この八日間で学んだ日本は私が以前に想像していたよりも遙かに美しいものでした。今回出会った人、事、物は私の心の中に種を撒きました。私は今後も努力をし、養分を蓄え、将来綺麗な花を咲かせたいと思います。

## 初めて

輔仁大學

日本語学科 三年 邱羿涵



日本語を学び始めてもう三年目になります。この三年間言葉を学んだだけでなく、多くの日本文化を学びました。しかし学習するツールは本やテレビなどのメディア、インターネットに限られ、日本の素朴且つ華やかな文化に憧れて日本語学科に入学した私にとって今回の活動以前に日本へ行ったことがなく、心の中では空しさが拭えませ



んでした。

今回の旅行は各大学、各学科から 20 名が集まりました。皆 26 日に初めて顔を合わせた後はこの八日間の旅行まで顔を合わせないため、心の中では見知らぬ人と一緒だと言う不安がありました。しかしこの八日間の旅行中、私たちは一緒に笑い、自分の長所でお互いを助け合い、一緒に目の前の美しい景色に感動し、まるで行軍のようなサラリーマンや元気な子供たちを見て一緒に興奮する、まさかそんな関係になるとは思ってもいませんでした。最後の夜は一緒に部屋に集まり、騒ぎながら、私たちを厳格に監督してくれ、多くの写真を撮ってくれ、一緒に笑ってくれた阿部さん、粛々と私たちの行程を進めてくれた鹿養さん、私たちに同行してくれ、各地の風習を紹介し、また常に私たちに通訳をしてくれた優しい末石さんに対して、小さなカードに感謝の気持ちを書きました。この三名がいたから、私たちは海外でもこんなに安心して楽しく旅行することができました。

もともと知り合いではなかった二十人が日本でお互い絆を結び、一緒に日本という魅力溢れる国土で数多くの美しい思い出を作りました。台湾に戻っても空港で長く別れを惜しんでいました。なぜなら私たちは知っていたのです。台湾に戻ると各々がそれぞれ別の方向に進み、また同じ 20 人で集まるチャンスはほとんどないことを。

今回のウィンターキャンプは多くの初体験を私

にもたらしてくれました。

初めてこんなに充実し、幸運な海外旅行を体験しました。そして、初めて新旧が融合した魅力溢れる日本へ来ました。

初めて雪で覆われた白銀の大地が朝日に照らされ、まるで宝石のように光輝いている様子を見ました。私の喜びとは対照的に天から舞い落ちる雪の花は静かに私たちへと降り注ぎ、ゆっくりと私の手の中で溶けて行きました。

初めて恥ずかしながら皆の前で服を脱ぎました。それは湯気がたっている露天風呂とその前に広がる雪が舞う美しい景色のためですが、心も体も無二の寛ぎを感じました。この時ばかりは多くの雑事を放り投げ、心を洗い流しました。

初めてお辞儀をして鮮やかな赤い鳥居をくぐりました。荘厳で静寂の中を歩き、冷たい水で汚れた靴を落とし、賽銭箱の前で敬虔な気持ちで合掌しました。百年を越える歴史を持つ本殿の床を踏みしめた際、靴下を通り感じた刺すような冷たさが私たちに前進を促し、本殿内部の神秘を窺い知ることができました。その後太陽の光の下、鬱蒼とした森を通り抜け、石で作られた階段を通り上へと登っていきました。そこでこの地に眠っている武将一家康公を参拝しました。

初めて雪化粧した富士山が薄く広がる雲の間に聳え立っている様子を見ました。車内の私たちは驚嘆の声を惜しむことなく捧げました。数日の日程で、山頂が真っ白な雪で覆われた富士山が恥ずかしそうに雲間に隠れてしまう様子を見ることができました。台湾にはこのような形の山はありません。ですからこのように皆の目を引くのです。台湾に戻る飛行機の中から近距離で何にも隠れることない美しい富士山の景色を見ることができました。

初めて人の温かさが溢れるホームステイをしました。心のこもった豪華な食事、これこそが私たちが受けた家庭での最も美しい場面です。温かな



こたつに入るよう薦めてくれ、日本人はとてももてなし上手だということ、自分の家に誇りを持っていることを感じました。最後別れの時には私たちが見えなくなるまでずっと手を振り続けてくれました。

初めてテレビを通さずにひな人形を見ました。そして近距離でじっくりと精巧に作られた人形を鑑賞しました。髪飾りから顔の表情、服に至るまで精緻な作りで、その様子に陶醉してしまいました。もてなし上手の伊東市の人々はこのような貴重なひな人形を1つ選び私たちの贈り物にしてくれたのです。とても驚き、また嬉しかったです。

初めて豪華絢爛な和服を着ました。着用方法が複雑な和服は一人では到底着ることはできません。お母さんたちの手助けの下、どの女子学生もまるで花のように美しく、男子学生は皆威風堂々の大人へと成長していました。帯はきつく結ばれ、呼吸ができないほどでしたが、背をまっすぐにし、小さな歩幅で文化財である東海館の中を歩いた経験は他の何ものにも代え難い美しい思い出です。

初めてスキー場へ行きました。不慣れな様子で全ての装備を装着し、スキー板とストックを担いでスキー専用の靴を履き、息絶え絶えに階段を登りました。停まれない恐ろしさを体験し、何度も転ぶ練習をしました。皆の笑い声の中スキー場のリフトに乗り、気持ちも高く登って行くリフト同

様どんどん高揚しました。どんなに寒くても、私たちの熱い想いの温度を下げることはできません。上に到着するとすぐに雪合戦が始まりました。疲れると人目も気にせず雪の上に寝そべり手足を大きく動かしました。体で今この時を感じようとしたのです。

これらの新鮮で好奇心溢れる体験の他に、宇都宮大学、静岡県立大学、東京外国語大学の学生たちと日台をテーマとした相互交流を行いました。皆一所懸命自分の学んだことを使い、日台間の旅行、違い、歴史文化、政治、学生運動、中国の見方など、これまで日本人と討論したことがないテーマに関して談義しました。日本語学科の私にしてみれば、異なった分野の語彙の認識や使い方の検証をする場になりました。このような交流活動に参加できたことで、旅行だけでなく、更に深く文化や政治、経済など幅広いテーマで日本人に台湾を知ってもらうことができました。交流をしていると、自分が担う役割がとても重要で、日本語能力を持つ私は多くのことができるのだと気づきました。自分の責任が重大であることを痛感しました。

長いようで短かった、短いようで長かった八日間、私たちは日本全土を廻ったわけではありません。じっくりと風情漂う日本の美しい景色を堪能したわけでもありませんし、八日間で日本を完全に認識できたわけでもありません。しかし萬巻の書を読むより万里の道を行け、という言葉通り、もし今回の身を持った体験がなければ、本当の意味で一つの国土の風土風習、文化、そこに暮らす人々を理解することはできません。日本人が何事にも真面目なこと、親切な態度、これら昔から受け継がれている『和』の心を直接目にするすることで、この日本と言う国は魅力溢れる忘れられない場所となりました。初めての日本旅行は私の人生に美しい一小節を刻みました。台湾に戻ると感動と感激でいっぱいでした。交流協会がこのような素晴

らしい機会を与えてくれたことに対し心から感謝します。今後もし機会があれば、自分の力を発揮し、台日間の交流をより活発にする手助けをしたいです。

## 感謝と学習の旅

政治大学

新聞学科 四年 林士評

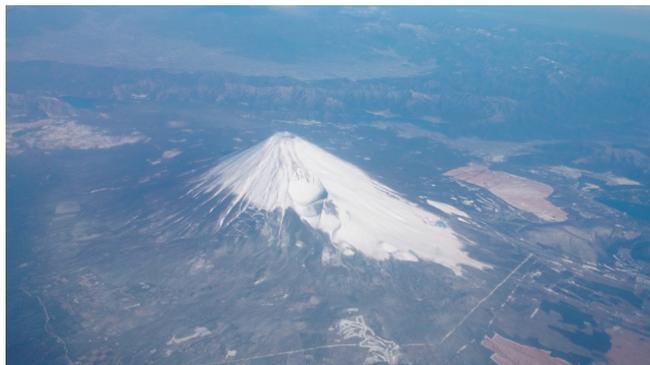


今回の「日本理解」ウィンターキャンプの日程は今思い返しても思わずにやけてしまうほど、心の中に限りない感謝が詰まったものでした。

まず日本政府が台湾大学生にこのような千載一遇のチャンスくれたこと、私たちに無償で日本の伝統と現代を体験させてくれたことに感謝します。

私はきっと永遠に忘れません。南国に身をおく私の初めて雪を見た時の感動を。初めて重装備で雪原に赴き滑ったスキーの興奮を。初めて日本のサラリーマンが整列をして、まるで行軍のように横断歩道を歩く姿を見た時の驚嘆を。初めて日本の大学生と日台の生活の違いや中国の台頭に関して話した衝撃を。初めて高層ビルが建ち並ぶ東京の街並を歩き、地下鉄の出口で寒風吹きすさぶ中路上で詩を売っている人を見た驚きを。初めて日本の和服を来た楽しさを。初めて日本の家庭でまるで家族のようなもてなしを受けた感動を。初めて富士山を見た時の喜びを。多くの初めてがあり、多くの思い出があり、三日三晩でも語り尽くせません。短い7日間のウィンターキャンプでしたが、こんなにも多くの美しい思い出ができたのは日本政府が心を配った手配をしてくれたおかげです。

ウィンターキャンプの情報が届いたのは本当に



突然のことで、全く予期していませんでした。大学三年から四年に上がる夏休み、久しく気持ちが沈んでいる時期、何百回という熟考を重ねた結果、日台関係の外交分野に身を投じようと決心しました。ですから大学四年の前期からすぐに本校の日本研究修士課程を受験する準備を始めました。しかし私自身は関係する学科の出身ではなく、これまで日本の政治・経済・外交の分野に対して深い理解があるわけではありません。勇気を出し、貪欲に日本研究修士課程の授業へ飛び込みました。その授業で今回私を推薦して下さった先生一蔡増家先生とお会いしました。その授業でただ一人の大学生だった私は先生の推薦を受けて今回の活動に参加することができました。当時この知らせを知り、内心驚きと喜びでいっぱいでした。その後の数週間、夢ですら笑いがこぼれてしまうほどです。蔡先生が日本で見聞を広げられるこのようなチャンスくれたことに感謝しています。

私自身は素食者ですが、日本の素食は台湾ほど普及しておらず、そのため日本の食事をほぼ全てガイド兼通訳の末石さんが責任を持って対応してくれました。食事前、どの料理が食べられるか、どの料理が食べられないか、を一つ一つ真剣に伝えてくれた他、もし材料が不明瞭な料理に出会ったら、いつも店員に動物系食物が含まれているかどうかを確認してくれました。時には彼の食事時間まで削っていたので、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。一度バスの移動中に末石さん

がわざわざ後ろの席まで来て私に翌日の朝食時間を確認してくれました。この努力は全て私が日本で安心して食事できるようにしてくれるためです。末石さんがいてくれたからこそ、七日間の旅行中私は何も心配なく目の前にある日本のおいしい料理を食べることができました。感謝の気持ちが言葉として溢れてきます。

日程の中で日本政府は特別に伊東市でのホームステイを手配し、私たちに日本の日常生活を体験させてくれました。私と団員の莊坤哲は服部さんが経営する民宿に泊まりました。環境はとても静かで、民宿の内装は精緻で趣があり、更に温泉にも入ることもできました。まるで自宅に戻ったかのように、こんなに親しみやすく距離の近い人のおかげで、私が今海外にいることを忘れてしまうほどでした。

私たちが食べたのは朝食ではありません。それは服部さんの愛でした。

私が特に忘れられないことは服部さん手作りの朝食です。香りや味はもちろん、栄養や健康をも考えたものでした。食べていると何の負荷もかからないだけでなく、服部さんの心配りが味わえました。

翌日の夜、歓迎会が服部さんのもう一棟の民宿で行われました。私が素食者だと知っている服部さんは歓迎会で特別に豪華な素食料理を作ってくれました。寿司、おでん、フレンチポテト、サラダ等です。私は動物系の味にとっても敏感で、少しでもそのような食物が入っていればすぐにわかります。しかしその日の歓迎会で私は予想もしていない上品で美味しいベジタリアン料理を安心して楽しむことができました。料理人が調理の過程で十分に注意してくれたことが感じられ、日本人の食べ物に対するこだわりを再認識できました。日本では素食者人口が少なく、素食料理に不慣れた日本人がこのようなベジタリアンの料理を作られるということは既にとてもすごいことです。服部



さんが私のために美味しい素食料理を作って下さったこと、本当に感謝しています。ありがとうございました。

随行して下さった郭永興先生、阿部さん、鹿養さんに感謝します。この旅で一緒に喜び、一緒に日本を理解しました。また私たちの安全を常に注意してくれ、私たちが松山空港に到着するまで気が抜けなかったことでしょう。本当にお疲れさまでした。ありがとうございました。

その他、郭先生にも特にお礼を申し上げます。最終日胃の調子が悪い私に末石さんと一緒に温かい豆乳を部屋まで持って来てくれました。また空港の薬局で胃腸薬を買ってくれたおかげで、飛行機ではずいぶん楽になりました。ありがとうございました。また、阿部さんと鹿養さんが気にかけて下さったことにも感謝します。私はもう大丈夫です。ありがとうございました。

今回の旅行は日本の招待への感謝はもちろんですが、日本人の精神を学べました。それは細かな点まで気づく注意深さと事前の完璧な準備です。おそらくこれらこそが日本が戦後迅速に復興した原因の一つだったと考えます。最終日から数えて二日目東京で行われた懇親会で日本に駐在している台湾政府幹部がこう言っていました。台湾に戻り日本人の完璧な準備を学べば、君たちの訪日は無駄ではなかった、と。

台湾社会に「船到橋頭自然直（意味：その時に

なれば自然とどうにかなる）」という諺があります。どれくらい準備をしても必ず問題が起こる。だから最後の重要な時になってからどのように対処すべきか考えれば良い、と常に思っていました。しかし日本社会の中でこの法則は全く存在しません。彼らはこの法則を全く信じていないのです。事前に全てのことを完璧に行うことこそが責任を負うということであり、他人に迷惑をかけないという表れなのです。

文化の間に優劣はありません。正否の違いもありません。「なんとかなる」という考えは自然と華人の社会の道理に存在しています。しかしもし台湾人が「事前の完璧な準備」を重視すれば多くの資源の浪費を解消できます。それは物質的な資源もあれば社会的資源もありますが、どちらも保護でき、有効に適所へ分配できます。このようにすれば台湾の強さが牽引されるのです。

最後に、この旅行中、東日本大震災の援助によって台湾人が日本で厚遇を受けていることを感じました。私が台湾人と知れば、皆が「感謝」や「台湾と日本は永遠の親友です」などという台湾に友好的な言葉をよく聞きました。もちろん日本人の「建前」というその場限りの言葉なのか、それとも「本音」なのかはわかりませんが、日本が台湾を重視してくれていることに感謝の気持ちでいっぱいです。しかし国際的な現実という障害があり、民間での台湾に対する友好的態度は日台国交正常化に反映されることは難しく、短期内での台湾と日本の国交の再締結を見ることはなさそうです。これは台日関係の残念な点です。しかしこのような状況だからこそ、私はこの難関を突破し、些細な力ですが将来的に貢献をし、日台関係のために新たな局面を作り、今回の日本政府が私たちに対する温かい招待の温情に報いたいと感じるようになりました。どうもありがとうございました。